研究ノート

国際交流美術展「PCFA × ZOKEI International Exchange Art Exhibition」とインドのモダンアートについて

About the "PCFA × ZOKEI International Exchange Art Exhibition" and Indian modern art

P11-22

木森　圭一郎
KIMORI Keiichiro

造形芸術学科

1.「PCFA×ZOKEI International Exchange Art Exhibition」について

2024年６月に、インドの総合大学 Pacific Academy of Higher Education and Research University（以下PAHER）内の美術カレッジ Pacific College of Fine Arts（以下PCFA）と、筆者が所属する九州産業大学造形短期大学部（ZOKEI）との国際交流美術展「PCFA×ZOKEI International Exchange Art Exhibition（以下PCFA×ZOKEI展）」を実施した。九州産業大学内の多目的ホール「グローバルプラザ」にて、2024年６月12日～18日まで催された。

展覧会フライヤー

展覧会の様子

また、展覧会期間中にはPCFAのRajesh Kumar Yadav教授（以下Rajesh教授）が来日し、筆者の受け持つ授業内において、ワークショップを実施して頂いた。

ワークショップの様子

ワークショップでは彼の最も得意とする、紙と樹脂系のメディウムを活用した、ミクストメディア（Mixed media）についての制作実演を行った。インドのアーティストの作品制作や、制作上のコンセプトに触れた事は、本学の学生にとって得難い経験となったのではないかと考える。

2.「PCFA×ZOKEI International Exchange Art Exhibition」の出品作品について

PCFA×ZOKEI展は九州産業大学造形短期大学部からは、教員３名、学生８名が出品し、PCFAからは教員５名、学生は21名が出品した。

PCFAは総合大学Pacific Academy of Higher Education and Research Universityを母体に、2022年に立ち上げられた新しい美術カレッジである。

既に『九州産業大学造形短期大学部 紀要 第45号』[1]にて触れた様に、今回の交流展に先駆けて筆者は2023年に、インドPCFAで催された国際アートイベントに招待作家として参加した。その際に触れ合ったPCFAの一部の学生とは、以後もSNS等のメッセンジャーアプリ等で、作品の講評を求められ回答するなど、交流を続けてきた。今回のPCFA×ZOKEI展では、スマホやPCのディスプレイを通してしか見る事が出来なかった彼らの作品を、直接見る事が出来た事を嬉しく思っている。

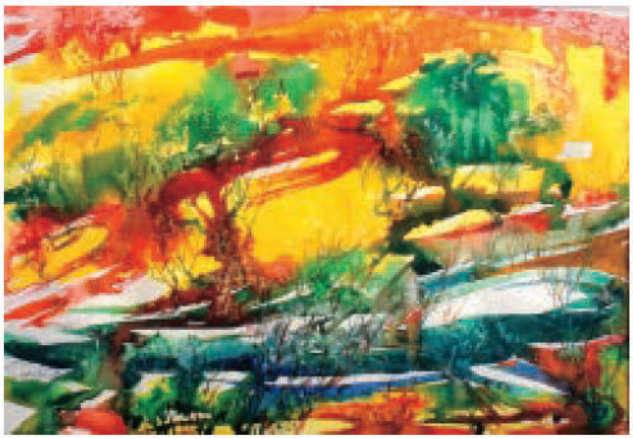
以下に記録として、PCFAのキャプション情報を記載する。各項目は、上から、製作者名、作品画像、タイトル、寸法、技法及び支持体の順に掲載した。

・教員作品

1、RAJESH KUMAR YADAV

「 KINETIC MIND 」
24×18inch
Acrylic on paper Mache relief

2、GOPAL PRASAD YADAV

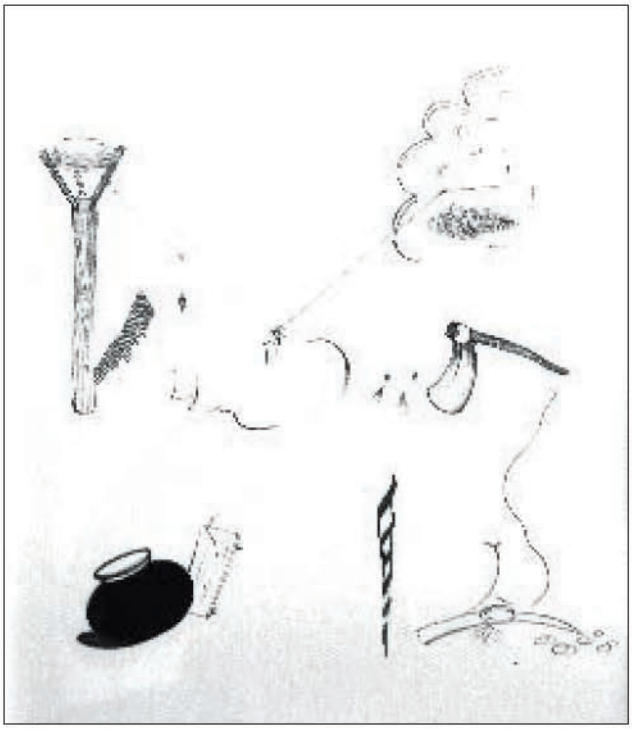


「 LANDSCARE 」
24×16inch
WATER COLOUR

3、GAURAV SHARMA

「 VIWE 」
46x46inch
Digital art

4、BHASKAR CHOWDHARY



「 JOTTING 1」
14×14inch
Pen & Drawing

5、MANMEET KOUR SALUJA

「FLOW OF LIFE」
31.5×31.5inch
Acrylic

6、DANIEL CONNELL　AUSTRALIA

「Live Portrait」
16.5×12inch
Charcoal

・学生作品

・修士課程２年生

1、CHANDAN SINGH BAGHEL

1-1

「Hormony of Heritage」
30×48inch
Charcoal

1-2

「Ganga Ghat」
30×48inch
Charcoal

2、RIDDHI GARG

「The eye series」
24×24inch
Oil on Canvas

3、RAJNANDANI MEENA

「The Faces」
24×24inch
Mix - medium

4、PRIYUL MENARIYA

「 A Portrait of Innocent girl 」
24×36inch
Mix - medium

・修士課程１年生

5、ISHITA JAIN

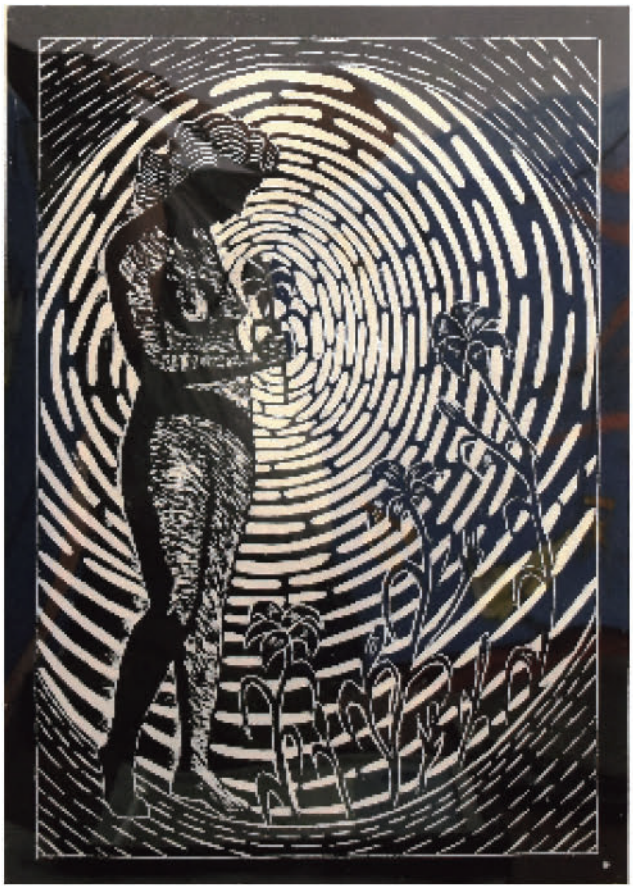
「 Pushpam 」
12×12inch、12×12inch、12×12inch
Acrylic on Canvas

6、SISODIA RANVIR KUMAR SITARAM

「 Universal Rama 」
28×22inch
Fabric collage

・学士過程２年生

7、CHETAN PURI GOSWAMI



「 The Lady with lily 」
23×16inch
Woodcut print

8、KRATI AGRAWAL

「 Untitled 」
12×16inch
Acrylic & Oil on Canvas

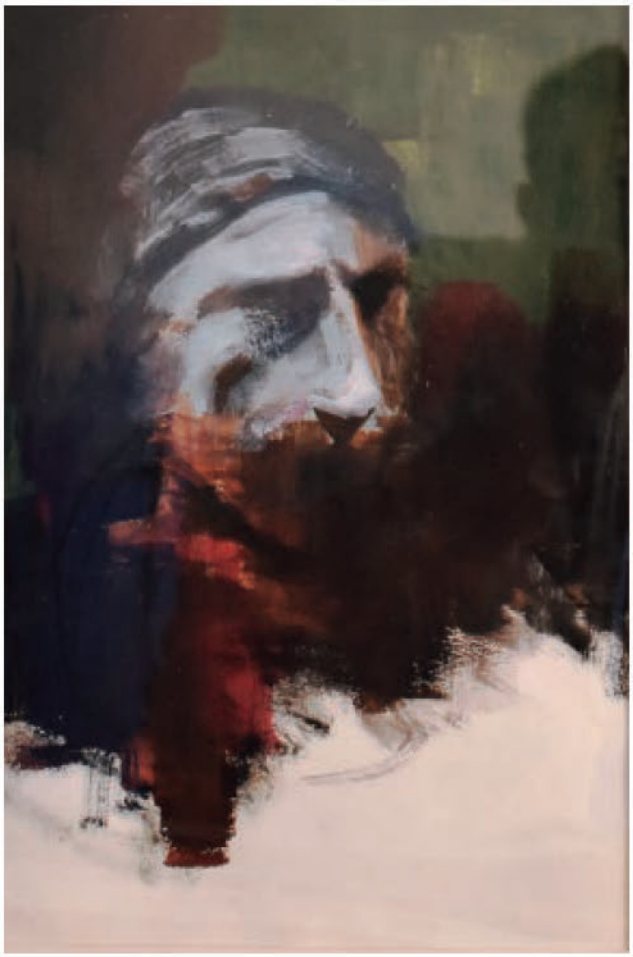
9、MAMTA SOLANKI

「 Tower of Scratch 」
20×20inch
Acrylic on Canvas

10、PRABHAV CHHAJED

「 The Low 」
18×14inch
Woodcut print

11、VEDANT SONI



「 Sublime Shades 」
15×12inch
Acrylic on Canvas

12、VISHAKHA

「 SCORER 」
20×20inch
Woodcut print

13、JADDHA PARMESHWARIS HRAVAN KUMAR

「 Dancing Lady 」
18×14inch
Acrylic & clay on Canvas

・学士過程１年生

14、DIVYA PANWAR

「Foot prints」
18×13inch
Woodcut print

15、MAHAK PANDOR

「Statue」
18×14inch
Charcoal

16、MARIYA HUZAIFA BANDOOKWALA

「The Lady in Red」
6×6inch、12×12inch、6×6inch
Oil on Canvas

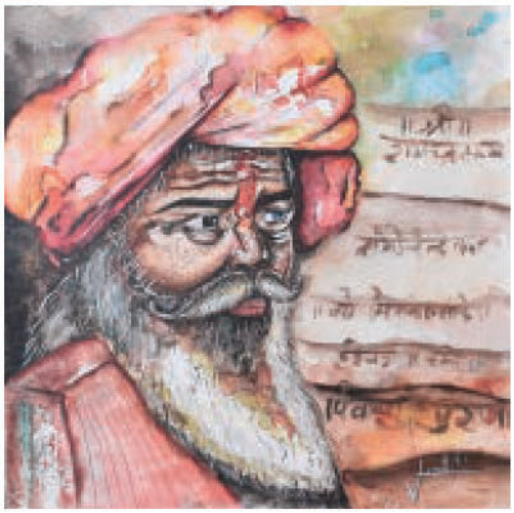
17、MANISHA JANGID

「NATARAJ」
50×24inch
Acrylic on Canvas

18、SANSKAR PANWAR

「 The Hampi 」
48×30inch
Acrylic on Canvas

19、VANDIT SALVI



「 HERITAGE 」
12×12 inch
Acrylic Canvas

20、VIKAS SEN

「Portrait」
24×16inch
Charcoal

3．特別講演「ABOUT INDIAN ART & ME」について

PCFAのRajesh教授には、PCFA × ZOKEI展の開催から遡る2024年１月10日にも、筆者が担当する講義の中で、ZOOMを利用したウェビナー形式での特別講演を実施して頂いた。本ウェビナーは英語によって実施された為、日本語へのリアルタイム逐次通訳をNHKグローバルメディアサービスに依頼した。

この特別講演は「ABOUT INDIAN ART & ME」と題し、インドの美術家の大学院までの修学状況、またその後の就職や並行したアーティスト活動などの実体験を、Rajesh教授ご自身の経歴を踏まえながら、分かりやすく解説して頂いた他、筆者から依頼する形で、「インドの現代アートとデザイン」についても講演の中で概論的に触れて頂いた。

その中でRajesh教授が注目すべき現代美術家として挙

実際にウェビナーにて使用した資料

げていたインドの美術家は、ティエブ・メータ（Tayeb Mehta）、S・H・ラザ（Sayed Haider Raza）、M・F・フセイン（Maqbool Fida Husain）、アニッシュ・カプーア（Anish Kapoor）、アムリタ・シェール＝ギル（Amrita Sher-Gil）、アルパナ・カウル（Arpana Caur）、ナリニ・マラニ（Nalini Malani）といった、７名の芸術家であった。

次項からは『The History of Indian Art』[2]の記述や、彼らについて触れたウェブサイトの内容を手掛かりに、Rajesh教授が紹介したインドのモダンアーティストの内、その先駆者としてティエブ・メータとM・F・フセインを、そして彼らの創設した先駆的美術団体ボンベイ・プログレッシブ・アーティスト・グループについて述べ、次いで日本で紹介されたインディアン・モダンの一例として、タゴール兄弟を、そして最後に2023年に日本の国際賞を受賞した女性美術家ナリニ・マラニについて触れ、インドのモダンから現代のアートについて理解を深めていきたい。

４．インドのモダンアーティスト達

4-1. ティエブ・メータ（Tayeb Mehta）について

『The History of Indian Art』[3]のティエブ・メータ（Tayeb Mehta、1925～2009）の項に目を通すと、ティエブ・メータは、「J.J.美術学校[4]で学位を取得し、その後イギリスで高等教育を受け、その後ロックフェラー奨学金を得てアメリカに渡る。帰国後、シャンティニケタン（インド東部、西ベンガル州）に留った。[3]」とあり、続けて「J.J.（美術学校）でフランシス・ベーコンやパウル・クレーなどの芸術家を紹介され、彼の芸術スタイルは発展した。[3]」と、彼がインドのムンバイで画学生をしていた時分から、ヨーロッパのモダン絵画に触れていた事が伺える。

また続けて、「彼の絵画のテーマには、「リクシャワラ（リクシャ［＝三輪の自転車型人力車］をこぐ人々の意[5]）」、「カーリー（原文Kaali、インドの女神）」、「マヒシャスラ（サンスクリット語、Mahish（バッファロー）asura（悪神））」などがある[3]」とされ、インドの風俗、善神、悪神と主題を限定せず、表現の射程を広く設定している事が分かる。

またこのうち「マヒシャスラ」シリーズの１作は「2006年にニューヨークのクリスティーズオークションで158万ドルという高値で落札され[3]」、これの件が彼の国際的な知名度を引き上げることに大きく寄与した。

また『The History of Indian Art』のティエブ・メータの項[3]で興味深いのは、「マヒシャスラ」シリーズに関わらず「彼の一連の絵画の特徴は、さまざまな角度から描かれた動物のレイアウトである[3]」とされる事である。

この様な多視点絵画は、ヨーロッパ美術の文脈では、セザンヌに始まり、ブラックやピカソによってキュビズム、以降抽象表現主義として展開されていく。

ティエブ・メータの絵画は、多視点による絵画的レイアウトの再構成という意味でキュビズム的だが、色や形象はフォービズムのマティス的である。ピカソの「アビニョンの娘たち」が1907年、マティスの「ダンス（Ⅱ）」が1910年に描かれており、そこから凡そ30年後のインドでは、フランスの抽象絵画は近代的な絵画表現として、先駆的なインドのアーティストの中で受容されていた事が伺える。

「ストロークで区切られた形、色彩効果を完璧に引き出す空間配置、人間の存在を分ける斜めの線、これらすべてが彼の作品の特徴なのだ[2]」。

4-2. M・F・フセイン（Maqbool Fida Husain）について

続けてティエブ・メータと関係の深いM・F・フセイン（Maqbool Fida Husain、1915～2011）についても『The History of Indian Art』の記述[6]を参考に理解を深めて行きたい。『The History of Indian Art』によると、フセインはマハーラーシュトラ州の都市「ソーラープル[7]で生まれ、インドールの美術学校で美術を学んだ。その後、途中で学業を断念[6]」し、その後は同州の州都ムンバイで「最初は映画のポスターを描いていた。その後、独自のスタイルで制作を始めた。[6]」とあり、「写実的なものを真似るのではなく、直線と曲線のストロークで概念的かつ創造的なひねり（twist）を加えた。[6]」

彼の創作は「現代の技術と媒体で新しい実験を続け、肖像画、風景、動物、公共生活、音楽、社会的概念に関する絵のほか、宗教的および政治的なテーマの絵を数多く描いた。[6]」と記載される様に絵画が中心ではあったが、実験的なインスタレーション作品の他、映像作品も多く制作している[6]。

彼の絵画表現は「しっかりとしたシンプルな筆致、爽やかで見事な色彩が彼の絵画の特徴。彼は油彩を使って巨大なキャンバスに概念的な作品を描いた。[6]」と評され、また「彼の絵はマトゥラ[8]の彫刻や細密画（miniature style）のダイナミックな色彩に大きく影響を受けた様だ。[6]」とも述べられている。

インド独立後の時代を生きた彼らの様な美術家にとって、ヨーロッパモダンとインドの伝統的表象を、どの様に関係させていくのかは大きな命題であったのだ。

4-3. ボンベイ「プログレッシブ・アーティスト・グループ」

インドのモダン絵画の傾向をより深く知るために、ここからは、ティエブ・メータやM・F・フセインが関わったアート団体、ボンベイ（現・ムンバイ）・プログレッシブ・アーティスト・グループ（以下BPAG）について述べていく。

『The History of Indian Art』の「The Progressive Group」の項[9]には「（インド）独立後の50年代には（中略）「モダンアート」は称賛された。[9]」とあり、このBPAGの創設にあたっては、「インド人アーティストのソウザ[10]が他のアーティストと共同で始めた」[8]とされている。このグループにはRajesh教授の講演においても触れられていた、S.H.Raza[11]や前出のM.F.Husainの他、Krishnaji Ara、Sadanand Bakre、Hari Ambadas Gadeなどの画家や彫刻家の名が挙げられている。

日本の戦後の公募展団体がそうであった様に、BPAGも「芸術についての自分たちの考えを公然と宣言」[9]している。

『The History of Indian Art』に記載された、BPAGの提示した原則[9]を概略すると「さまざまなテーマ、技法、メディアについて完全に自由で、制限しない」、「多様な

芸術を統合する」「強調的で大胆な筆致を使用し、さまざまな形や形状を歪曲する」とあり、逆説的にインドの従来の美術表現が「限定的で制限され」、「各表現領域に分けられ」、「抑制的で丹精、現実の形態に即した」ものが主流であった事が類推される。実際に「アジャンター石窟群」の壁画などを見ると、この様なインドの伝統美術の傾向を伺い知る事が出来る。

BPAG活動期間は３年程度[12]だが、彼らの目指した「芸術の統合」はインドのモダンアーティストにとって、基本的な指針となっている様に思える。

4-4. タゴール兄弟について

この様なインディアン・モダンの表現傾向は、日本では東京国立近代美術館が企画展「アジアのキュビスム：境界なき対話」[13]の中でも紹介されており、そこではガガネンドラナート・タゴール（Gaganendranath Tagore、1867～1938）が「1920年代にインドで初めてキュビスムや未来派の様式を取り入れた画家[13]」として紹介されている。

『The History of Indian Art』にもタゴールについて記載[14]があり、「アカデミックな芸術を学んだわけではなく、兄のアバニンドラナート・タゴール（Abanindranath Tagore、1871～1951）から絵画の訓練を受け、独学で芸術家になった。[14]」と解説されている。兄のアバニンドラナートと共に「Oriental Art Societyを創設し[14]」、「アジャンター石窟群からインスピレーションを得た、国粋主義的なインド美術[15]」を主張している。

タゴール兄弟は親戚に著名な詩人ラビンドラナート・タゴール（1861～1941）がいる。彼は岡倉天心らとも関わりがあったとされ 、日本にも縁がある芸術家である。

その影響からか、弟のガガネンドラナートは「当初は文学に強い関心を持って[14]」おり、その後兄から絵の教えを受け「38歳で絵を描き始めた[13]」。兄のアバニンドラナートが、淡色の表現を得意とした事に対し、弟のガガネンドラナートは「ほとんどの絵には濃い色を使っている。[14]」

タゴール兄弟は「ベンガル・ルネサンス運動の中心的人物としての役割を果たした。[14]」

4-5. ナリニ・マラニ（Nalini Malani）について

ここからは日本の国際賞を受賞した女性美術家ナリニ・マラニ（Nalini Malani、1946～）について触れていく。

ナリニ・マラニは2023年に、科学や技術、思想・芸術の分野に大きく貢献した人々に贈られる日本発の国際賞「京都賞（第38回）[18]」を受賞している。筆者の住む福岡にも彼女の作品を収蔵した美術館[19]があり、親しみを感じている。

ナリニはイギリス領インド帝国カラチ（現在のパキスタン）に生まれ、１歳の頃にはインド・パキスタン分離独立時に難民としてインドに逃れた。前述のBPAGが結成されたのが丁度この頃なので、彼らからすると、彼女はずいぶん後輩である。

その後ムンバイで美術を学ぶが、彼女が通ったのは前述のティエブ・メータと同じJ.J.美術学校であった。[20]1969年に同大で学士号を取得し、その後数年間ムンバイにスタジオを構え、1970年から72年にパリに留学、1985年にはデリーで初のインド人女性アーティストのみによる展覧会を企画し、1987～89年に掛けて巡回展を主導・開催した。[18]

1989年には米国への渡航と仕事のための助成金を受け[18]、2002年にはニューヨークの新現代美術館にて海外美術館での初個展、2007年 第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2012年 第13回ドクメンタと輝かしい実績を重ね、2013年には福岡アジア文化賞の芸術・文化賞を受賞[21]した。

彼女の作品世界は「インド亜大陸の近現代史と向き合い、映像と絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、今日的かつ普遍的なテーマを追求（2013福岡アジア文化賞）[21]」や「抑圧に苦しむ「声なき者の声」を多くの人々に届けようとする意志に満ちた作品を生み出してきた。また、非欧米圏の、特に女性の社会進出が難しい地域出身のアーティストとして、世界的に活動してきた先駆者の一人であり、20世紀末から30年以上続く美術の「脱中心化」の推進力となってきた。（2023京都賞）[18]」といった様に評されている。

筆者が彼女の作品を初めて見たのは、20年以上前の学生の時分に、福岡アジア美術館での企画展であったかと思う。複数のキャンバスを繋げた横長の連作「略奪された岸辺（Despoiled Shore）」[22]は、キャプションを読むまでもなく、彼女の人生の苦悩と思索を筆者に直観させた。

「略奪された岸辺（Despoiled Shore）」の表現それ自体はけして写実的・技巧的ではなく、情動的で象徴的である。ナリニ・マラニの脳裏のイメージを、そのまま出力した様な画面上の形態は、アクリル絵の具で描かれているにも関わらず、チョークやパステルを彷彿させる素朴さに満ちている。

その率直さが、彼女自身の人生の苦悩そして、人類史における声なき者の悲愴を、我々に訴えかけるのである。

生まれてすぐに難民として育ち、困窮する中でも学問に励み数々の奨学金を自らの力で掴み、アカデミズムを身につけ、そこからの展開を模索してきた、彼女の生き様は偉大であり、これからも芸術表現を通して、我々に示唆をもたらすのだ。

5．まとめ

PCFAそしてRajesh教授の協力により、講義や国際交流展を通して、日本ではあまり馴染みの無いインド美術の現在を知る事が出来たが、本研究ノートでは、そこから興味を広げる形で、インドのモダンアートの状況を眺めていった。

執筆の過程でRajesh教授にBPAGとその周辺について、いくつかメールにて質問を行ったが、その中で「J.J 美術学校は英国統治時代に開校した４つの大学のうちの１つで、プログレッシブ アーティスト グループ出身のアーティストのほとんどが英国の教育傾向に反対の声を上げていた。しかし一方で、その時期にベンガルでも、ハヴェルとともに、ラビンドラナート・タゴールがインド側の美術教育に新しい形を与え、後に現代美術史として知られるようになったインドの伝統美術と組み合わせた新しい実験を行っ

た。」との回答を得た。

今後はRajesh教授から示唆された「英国統治時代に開校した４つの大学」の教育の内容や、タゴール兄弟がOriental Art Societyやその周辺で行ったであろう「インドの伝統美術と組み合わせた新しい実験」について研究を進めたい。それは単にインドのモダンアート史を知るという事だけでなく、PCFAやRajesh教授といった現代のインド美術への理解を深める事に繋がるのだ。

参考文献及びウェブサイト

---

[1] インド国際アートイベント「Face to Face with Master Artist- 2023」における制作と実演
・「九州産業大学造形短期大学部 紀要 第45号 』29-36頁
・九州産業大学学出リポジトリ
http://repository.kyusan-u.ac.jp/dspace/bitstream/11178/8359/1/zoutan45-005.pdf

[2] 「The History of Indian Art』英訳, Kindle版
Sandhya Ketkar著、
Anil M. Rao 英訳
2020
出版社：Jyotsna Prakashan ASIN : B087NQGHBP

[3] Tyeb Mehta
「The History of Indian Art』英訳, Kindle版, 191頁

[4] Sir Jamsetjee Jeejeebhoy School of Art
・https://en.wikipedia.org/wiki/Sir_J._J._School_of_Art
・https://www.sirjjschoolofart.in

[5] 「１人の男が語る都市の生活 ――バングラデシュ，チッタゴンでの聞き取りから―― 高 田 峰 夫」, 2009, 3頁
https://core.ac.uk/download/pdf/236179369.pdf

[6] M.F. Husain
「The History of Indian Art』英訳, Kindle版, 189-190頁

[7] ソーラープル(Solapur)
・インド南部の都市
https://ja.wikipedia.org/wiki/ソーラープル

[8] Art of Mathura
https://en.wikipedia.org/wiki/Art_of_Mathura

[9] The Progressive Group
「The History of Indian Art』英訳, Kindle版, 187-188頁

[10] F.N.Souza (Francis Newton Souza)
https://en.wikipedia.org/wiki/F._N._Souza

[11] Sayed Haider Raza
https://en.wikipedia.org/wiki/S._H._Raza

[12] Bombay Progressive Artists' Group
https://en.wikipedia.org/wiki/Bombay_Progressive_Artists%27_Group

[13] アジアのキュビスム：境界なき対話
2005.8.9–10.2
東京国立近代美術館
https://www.momat.go.jp/exhibitions/423

[14] Gaganendranath Tagore
「The History of Indian Art』英訳, Kindle版, 168-169頁

[15] Abanindranath Tagore
https://en.wikipedia.org/wiki/Abanindranath_Tagore

[16] Rabindranath Tagore
「The History of Indian Art』英訳, Kindle版, 168-169頁

[17] https://ja.wikipedia.org/wiki/ラビンドラナート・タゴール

[18] 京都賞ウェブサイト
https://www.kyotoprize.org/laureates/nalini_malani/

[19] 福岡アジア美術館ウェブサイト
https://faam.city.fukuoka.lg.jp

[20] Nalini Malani
https://en.wikipedia.org/wiki/Nalini_Malani

[21] 福岡アジア文化賞ウェブサイト
https://fukuoka-prize.org/laureates/detail/0eb1b458-4619-4f1c-8c41-80f0f42e1d53

[22] 「略奪された岸辺(Despoiled Shore)」
1993,https://faam.city.fukuoka.lg.jp/collections/2643/